神戸女子大学古典芸能研究センター　2007年度第3期常設展示

—近代神戸の能楽（Ⅰ）—

「大正・昭和初期の能舞台をめぐって」

関西の能楽文化を語るとき、神戸は京都・大阪の陰に隠れている感が強いのですが、近代の神戸には、京都や大阪とはまたひと味違った、豊かな能の文化がありました。とりわけ謡は盛んだったと言われており、神戸地区の謡曲愛好家を対象とした『神戸謡曲界』という雑誌が長きにわたって刊行されたりもしています。しかし、残念ながらこうした貴重な資料は、第二次世界大戦時の空襲や阪神淡路大震災によって多くが失われてしまいました。こうした大切な資料を後世に伝えるのは私たちの大切な務めでしょう。いま現在かろうじて残されているものを求めながら、本センターでは、今後さまざまな側面から近代神戸の能について紹介していきたいと思います。

今回は、「近代神戸の能楽」企画の第一弾として、戦前の神戸にあった能舞台とそれをめぐる人々についての逸話や資料を整理しました。雑誌『神戸謡曲界』や上田隆一の能楽普及活動については次回以降、機を改めてご紹介します。どうぞご期待ください。

Ⅰ　大正・昭和初期の能舞台

神戸の能舞台に関わる略年表（1910年頃～1940年代）

明治 34 年 05 月 24 日	和田岬の**和田神社能舞台（①）**で新築舞台披き奉納能
明治 38 年 04 月 16 日	和田神社で観阿弥五百年祭式能が観世清廉の主宰で開催される。（この会は、続いて大阪、京都、東京でも開催）
明治 38 年 07 月 14 日	和田神社で神戸観世会の奉納能楽の催し
大正 01 年 11 月 16 日	神戸市湊川に**大西能楽堂（②）**が完成し、６日間にわたって落成披露能が開催される。
大正 13 年 09 月 23 日	大西亮太郎が「手塚」に改姓し、貞三氏養子披露を兼ねた手塚披露能を、大阪（20、21 日）に 続いて開催。 ＊以後、大西能楽堂は「**湊川能楽堂**」と改称か。
大正 14 年 11 月 15 日	神戸市会下山町に、上田隆一邸の能舞台竣工。
大正 15 年 03 月 10 日	**上田能舞台（③）**の竣工披露祝賀会

昭和 06 年 11 月 13 日	手塚亮太郎逝去
昭和 10 年 06 月末日	湊川能楽堂閉鎖。８月に解体撤去、舞台は 10 月に七宮神社に移築。
昭和 12 年 02 月 28 日	株式会社神戸能楽会館設立発起人会立ち上げ。
昭和 13 年 05 月 07 日	**神戸能楽会館（④）**竣工式。翌８日、竣工祝賀披露能。
昭和 20 年 03 月 17 日	神戸大空襲で上田舞台、和田神社能舞台焼失。
昭和 20 年 06 月 05 日	阪神間の大空襲で、神戸能楽会館焼失。
昭和 22 年 02 月 15 日	第一回宝塚能　（＊宝塚歌劇は、前年４月 22 日に再開第１回公演）
昭和 22 年 06 月	神戸市川崎に大慈保育園内に**大慈能舞台（1）**完成。
昭和 22 年 10 月 11 日	第二回宝塚能、２日間にわたって開催される。以下６回開催。
昭和 22 年 11 月 14 日	国鉄元町駅西側の高架下に**元町能楽堂（2）**が完成。
昭和 23 年 09 月 04 日	阪急西宮球場で「能と舞踊の会」（球場能）が開催される。
昭和 23 年 10 月 25 日	**日芸会館**建設のための「関西能楽会」が認可される。
昭和 25 年 03 月 17 日	日芸会館棟上げ式。三日後、上田隆一逝去。
昭和 25 年 11 月 20 日	日芸会館が完成。舞台披祝能が三日間開催される。
昭和 25 年 12 月	この頃、元町能楽堂閉鎖か。

現在、神戸市内には、見所（けんじょ）（＝観客席）を備えていて定期的に演能会の催される本格的な能舞台として、上田観正会能楽堂（長田区大塚町２－１－１４）と湊川神社神能殿（中央区多聞通３－１－１）の二つがあります。ところが、第二次世界大戦までは、①和田宮神社能舞台、②湊川（大西）能楽堂（能舞台はのちに七宮神社に移築）、③上田能舞台、④神戸能楽会館の四つの大きな能舞台がありました。残念ながらこれらはすべて戦災で焼失してしまいました。第一部ではこれらの能舞台について紹介します。

第二部では、湊川（大西）能楽堂を作った大西亮太郎と、自邸に上田能舞台を作り、神戸能楽会館設立の中心人物でもあった上田隆一という二人の能楽師をとりあげます。この二人は、近代神戸の能

楽興隆に大きな力となった人物でもありました。

戦後については今回はほとんど触れられませんが、戦後まもなく作られた二つの舞台の演能写真を掲げました。街の復興もまだ充分とは言えない頃、早くも大慈能舞台と 元町能楽堂とが相前後して造られます。この二つはどちらも大規模なものではありませんでしたが、能舞台を失った神戸の能楽師や能・謡曲の愛好家にとっては、大きな支えとなりました。大慈能舞台は大慈保育園の高橋とみ園長（当時）の私設であり、元町能楽堂は先述の観世流能楽師・上田隆一（後に西宮の日芸会館設立にも奔走）の尽力によってできたものでした。大慈能舞台は現在は能の公演等で使われることはありませんが、今なお大慈保育園の園児たちの生活の中で活躍しています。

①和田宮神社能舞台

所 在 地	兵庫和田岬（現 神戸市兵庫区和田宮通3丁目2－45）
存在期間	明治34年05月～昭和20年03月17日（焼失）

大正期に入るまで、神戸には本格的な能楽堂はありませんでした。比較的大きな能舞台があったのはこの和田神社で、見所はないものの、ここでは明治期に下記の３回、大規模な演能会が開催されています。（別掲①－A・①－B参照）

明治 34 年 05 月 24 日　　舞台披奉納能
明治 38 年 04 月 16 日　　観阿弥五百年祭追善能
明治 40 年 07 月 14 日　　神戸観世会別会

この舞台は、明治 34 ～ 35 年の神社移築の際に新築されたものです。移築は三菱が和田岬にドックを作るためで、明治 26 年三菱造船所の建設計画が発せられて、明治 32 年 10 月 31 日に遷座祭が行われました。明治 34 年 12 月移転により神域の造成完了、明治 35 年 05 月に現在の場所に移転を終えます。その折に、社務所、神饌所、能舞台は新しく建てられました。

能舞台の新築にあたって、兵庫津の名主家であり、和田岬砲台竣工に尽力した神田兵右衛門が関わっていたのでしょう。神田兵右衛門は「神戸に於ける（能の）復興宣伝の為」毎年正月四日「御面掛」の古式を主要な神社に奉納することをしていました。これは、「四日、早朝から大西閑雪、大西亮太郎、改正龍造等の弟子達も兵庫出在家町の神田邸に集まり、粥のような軽い朝食の後、和田神社を振出しに七宮神社、長田神社、湊川神社、生田神社の五社を廻って奉納。」（神田三郎「神田兵右衛門胤保翁を偲んで」『神戸史談』251 号、1982 年）といったもので、『神戸謡曲界』53 号掲載の記事（別掲①－C）によると、明治 34 年正月から始まり、兵右衛門の没する昭和 10 年まで続いたようです。後掲の大西亮太郎は叔父の大西閑雪とともにこの行事に当初から参加しており、それが亮太郎の神戸進出のきっかけともなったのでした。

明治 38 年 04 月 16 日には、「観阿弥五百年祭記念式能」という、当時としては画期的な催しが盛大に行われました。全国では大阪（博物場能舞台）で一日、東京（観世舞台）で二日と、３ヶ所だけで催されたもので、それを受け容れるだけの素地が神戸にはあったということでしょう。大西亮太郎のほか、明治の終り頃から大正期にかけて、神戸には岡崎益太良や、伊東隆三郎、藤井美蔭といった、後の神戸の能楽界の担い手となった人々が次々にやって来ることになります。第一次世界大戦の好況

を背景に、神戸の能楽興隆期ともいうべき時代を迎えたのでした。

この舞台は、明治期には演能に使われることもあったものの、大正元年に大西亮太郎が湊川に能楽堂を設立してからは、使われることはなくなったようです。写真は残っていないのですが、戦前の神社境内大観図（別掲①－D）からわずかにその様子をうかがうことができます。また、昭和 16 年に当地を訪れた、明石在住の能研究家 横山杣人（そまびと）は、そのさびれた様子を「外部の三面は羽目板にて全て覆ひ鎖され…今は物置の倉庫に利用」（「樵日記・三八四」『能楽世界』640 号）と記しています。

昭和 20 年 03 月、神戸大空襲によって神社もこの舞台も完全に焼失してしまいました。戦後、昭和 32 年に本殿等が復興しますが、能舞台が再び造られることはありませんでした。（ちなみに、復興の折に境内の建物の配置が変えられていますので、戦前に社務所があった場所が現在の本殿に相当し、能舞台は現在の稲荷社や巳塚のあたりに位置していたことになります。）

なお、他の神社については、生田神社にも能舞台があったことが確認されていますが、演能で使われることは殆どなかったようで、わずかに昭和初期に奉納能楽会が催されたようです（別掲①－E 参照）。写真はないのですが、生田神社の舞台の鏡板は老松ではなく老杉の図（深田直城画伯筆）が描かれており、端掛かりの松も杉で、「一の松」ならぬ「一の杉」であったということです。また、湊川神社では、明治 10 年前後の「楠社舞台」での演能記録が『神戸謡曲界』３号（別掲①－F）に掲載されていますが、これは能舞台ではなく「拝殿を使用したもの」でしばしば演能に利用されたといいます。

②大西能楽堂（湊川能楽堂）

所 在 地	神戸市兵庫区荒田町４丁目 （大西亮太郎の所有）
存在期間	大正元年11月～昭和10年08月（閉鎖）

神戸ではじめての本格的な舞台は、大西亮太郎が先の神田兵右衛門（＊「①和田神社能舞台」を参照）ら、社中の地元の有力者たちの助力を得て建てた、湊川能楽堂でした。設立当初は「大西能楽堂」と呼ばれていたようですが、亮太郎が手塚に改姓（手塚家改姓披露能開催は大正 13 年 09 月）してからは「湊川能楽堂」と改称しています（大阪ではいずれも「神戸～」を付した通称）。

能楽堂の場所は「湊川遊園地の北端、松籟笛鼓に和する所」で、その様子は「舞台、橋掛り、鏡の間。楽屋等、すべて古式に則りて建築し、見所は約七百人を容るゝ広さあり、特に採光の設備行届きて、内舞台の短所たる薄暗く陰気な点更になく、頗る晴れやかなる舞台なり。」（「大阪毎日新聞」、大正元年 11 月 26 日付）と評されています。

竣工は大正元年の 11 月で、同月 16 日から実に６日間にわたって披露能が催されました。初日は観世家元の「翁」、２日目は大西閑雪・亮太郎が左右尉をつとめる「翁」十二月往来ほか、関西の主だった演者たちが集って大曲が次々に演じられました。３日目からは素人能で、６日目は素謡会という構成で、「兵神間の実業家連を中心に大阪よりも素人の天狗家数氏加勢して」行われ、「其中には神田松雲翁、武岡豊太氏等の剛の者あり、恰も素人能楽家の一大競技会といふべく、関西地方では一寸例の無き大催し」（前掲「大阪毎日新聞」）でした。番組の詳細については、別掲②－A（『神戸謡曲界』４２号「あゝ湊川能楽堂　―落成披露当時を回顧―」）をごらんください。

その後、昭和 10 年の閉鎖まで、この能楽堂では数多くの能会が開催されました。その様子を、『神

戸謡曲界』及び、大阪で刊行されていた『能楽写真界』に掲載された写真（別掲②－Ｂ）でご覧ください。このように、演能写真は雑誌にも掲載されているので舞台周辺の様子はうかがえるのですが、客席や建物外部の様子は未詳です。ただ、出演者の並ぶ記念写真が『神戸謡曲界』に何枚か掲載されています。ここには、上田隆一氏主催の観正会の記念写真（別掲②－Ｃ）を掲げました。木造の外観がある程度は分かります。

大正期から昭和の初めまで神戸の能楽界を支えてきた湊川能楽堂は、昭和 06 年 11 月、大西亮太郎の逝去によって主を失い、大きな転換点を迎えます。昭和 07 年 09 月、大西亮太郎門下の上野義三郎が一家で神戸に移住してくることになりました（別掲②－Ｄ）。慢性的な赤字を抱えた能楽堂は、しばし命を長らえたものの、昭和 10 年養嗣子の手塚貞三が敷地を売却するために閉鎖が決まります。能舞台だけは七宮神社に移築が決まり、能楽堂内に住んでいた上野は帰阪することになりました。湊川能楽堂の閉鎖を惜しむ声は大きかったのでしょう、『神戸謡曲界』は２号続いて関連記事でうまり、特集号の体をなしています（別掲②－Ｅ）。ちなみに、４２号に神戸在住の能楽研究家 香西精が、この時点ですでに「能舞台経営論考」という小論を（しかも他の稿とは区別して本名で）書いていることは注目に値するでしょう。香西は、能楽界を現状を客観的に見つめながら、個人で能舞台を維持することの困難さを指摘し、玄人の演者や同好者が集まって組織を立ち上げ、協力して舞台を持つべきだと述べています。いうまでもなく、この合理的思考は、神戸能楽会館設立へつながっていくことになるのでした。

③上田能舞台（観正会能舞台）

所 在 地	神戸市兵庫区会下山町2丁目１９１―１６
存在期間	大正14年11月～昭和20年03月17日（焼失）

後に観世流職分となった上田隆一が、独力で木造二階建居宅の階上に設置した舞台です。この舞台の様子は、上田隆一の長男、上田照也の活動をまとめた『点を線にしたい　―私本・上田照也の歳月―』（畔柳盈雄・坂田昭二、1990 年、別掲③－Ａ）に詳細に述べられており、写真も掲載されています。敷舞台ながら「橋掛かり、鏡板及正面屋根など凡て本舞台式の構造」であり、畳敷きの見所もありました。大正 15 年 02 月 21 日「観正会舞台落成大会」を、同年 03 月 10 日には家元一行を招聘して大々的に竣工披露祝賀会を開催しました。（別掲③－Ｂ・③－Ｃ・③－Ｄ）一能楽師が自邸に作った舞台としてはかなり大規模なものだったのでしょう。神戸の記事はめったに掲載されない、『謡曲界』の「関西通信」の欄に「上田隆一氏舞台披き」として短い記事を伴苔園が書いています（別掲③－Ｅ）。

大正 14 年に完成した舞台は次第に手狭になり、５年後には改造されて百余人収容の畳敷見所が完成しました（別掲③－Ｆ）。正面玄関から以外にも、階下の居宅から見所と舞台へと上がれるように階段が三つあるという、当時の和風建築としてはあまり例のない造りだったといいます。同年 05 月の祝賀の社中会には、先代宗家がわざわざ来神し、「葵上」を謡いました。

しかし、昭和 20 年 3 月 17 日、午前２時半頃から約２時間続いた米軍機の猛爆で神戸市内は火の海となり、この能舞台も炎上してしまいました。

④株式会社 神戸能楽会館

所 在 地	神戸市神戸区下山手通7丁目１８
存在期間	昭和13年05月～昭和20年06月05日（焼失）

昭和 10 年の湊川能楽堂閉鎖の直後から、神戸に能舞台を…という声が出はじめました。この年、上田隆一は、在神能楽師とともに「神戸能楽殿建設協議会」を結成して、能楽堂建設へ向けて動きはじめます。日本全体が第二次世界大戦へ向けて邁進し始める時期でもあり、このような時に能舞台を作るとは…という自粛の声もあがる中、多くの困難を一つずつ乗り越えて、株式会社組織をとるこの舞台の計画は進んでいきました。昭和 12 年 02 月 28 日、株式会社神戸能楽会館創立総会が開かれました（代表に竹馬準三郎（取締役社長）、山田種 章（専務取締役）、能楽師側発起人は、藤井美蔭、上田隆一、林信孝、川越英治）。資本金 10 万円でという計画は、物価の上昇で 15 万円に増資せざるを得なくなったりもしましたが、ようやく 10 月 10 日に地鎮祭、明けて昭和 13 年 01 月 18 日に上棟式を迎えるに至ります。05 月 07 日には、先代宗家をはじめ、分家の銕之丞家、東京、京都、大阪の職分家、県や市及び財界代表など約 300 人を迎えて竣工式、翌 08 日には舞台披露能楽会が朝から催されました。こうした建設にいたる経過は、上田隆一自身がが雑誌『観世』に寄稿しています（別掲④－A）。

会館の外観全景（別掲④－B）及び舞台の様子（別掲④－C）は写真をごらんください。『神戸謡曲界』は５０号に完成予定図（別掲④－D）、神戸能楽会館落成記念号の５３号には、全景写真（別掲④－E）を掲載しています。建物は、木造一部鉄筋コンクリート造二階建　延べ 392 坪余（地階とも）で、定員は公称 425 名（実数は 820 名）という大規模なものでした。舞台は、昭和 10 年に完成した大阪の大槻能楽堂をモデルにした、当時としては最新の本格構造で、テコを利用して目付柱が２センチほどせり上がり、取り外しのできるようになっていました。また、写真では分かりませんが、本舞台の横に接する客席（ワキ正面桟敷）の一部がせり上がって補助舞台となり、能楽以外の芸能にも使用できるステージに転換する仕組みになっています。見所は一階の一部に御簾席があり、二階は当時珍しい椅子席、常設の食堂も完備されていました。設計図は上田隆一が、自ら引いたと述べています。鏡板は多田敬一画、そのほか「會舘の電話番號が元町 3246 番＝見に寄ろ＝と呼ばれ、非常に記憶に安く会館として格好の番号である。かうした些事にも考慮が払はれて居る事が首肯出来る。」（『神戸謡曲界』５３号）など、さまざまな工夫もなされて、話題を呼びました。

神戸能楽会館の完成を機に、神戸観世会の結成が許されることになるなど、この能楽堂を足がかりに神戸の能楽界は大きく進展します。この後、昭和 14 年には上田自身も職分に昇格し、能楽普及会を結成し、能楽教室を開設するなど、能楽の普及に関するさまざまな活動をはじめます。しかし、戦局は悪化の一途をたどり、遂に昭和 20 年 06 月 05 日、米軍の B29、350 機がふたたび神戸を空襲、この舞台も焼失してしまいました。

戦後の舞台

1 大慈能舞台

所 在 地	神戸市中央区東川崎町6－2－6　大慈保育園内

存在期間	昭和21年07月～現存
備　　考	＊「舞台は間口奥行とも一回り大きく、反響も良いが惜しいことに橋懸が短い。 この舞台も能楽会や謡会によく利用されたが最近は一般にかさない。」（土居晴夫「神戸能楽界の戦後二十年」）

2 元町能楽堂

所 在 地	ＪＲ（当時は国鉄）元町駅東口のすぐ西側、高架の一角
存在期間	昭和22年11月～昭和25年末（閉鎖）
備　　考	＊上田隆一は会費二百円の元町定期能楽会を結成。（一年で消滅） ＊所有者は角谷誠亮　（計画は上田隆一） ＊「本式を模していたものの、間口奥行ともに狭い上に、高架を支えるコンクリートの太い柱が上下につらぬき、天上の上を汽車や電車がひっきりなしに往来するので、その騒音と震動が謡や囃子にまじって、到底幽玄の境に浸れたものではなかった。謡会であればどのような場所でも行なえるが、能楽となると他に舞台が無かったのであるから、地の利に恵まれ、よく利用された。」（土居晴夫「神戸能楽界の戦後二十年」）

大西亮太郎（『神戸謡曲界』4号掲載）

Ⅱ　能舞台をめぐる人物

湊川能楽堂と大西亮太郎

大西亮太郎（手塚亮太郎、てづか りょうたろう）

慶応２年（1866）12 月 16 日～昭和６年（1931）11 月 13 日　明治～昭和初期の能楽シテ方観世流。大坂生まれ。大西寸松の娘しづ子の長男。手塚家へ嫁した母が離縁して大西家へ帰り、亮太郎も長く大西姓を称した。幼少から祖父寸松や叔父閑雪の薫陶を受け、初舞台は明治３年（1870）「大仏供養」の頼朝。少年時代に上京し、二十三世観世清廉・初世梅若実・梅若六郎（後の観世清之）に師事。明治 23 年に帰阪後、大阪・神戸に３つの能舞台を建て流勢拡張に尽力。大正８年（1919）に建てた大阪能楽殿は全国の個人所有舞台中に冠絶するといわれた。関西観世流の重鎮。

養嗣子の手塚貞三（後の雅三）は昭和 15 年（1940）に大阪能楽殿を手離し、孤高の生涯を送って 46 年に没した。（『日本芸能人名事典』三省堂）

本格的な能楽堂、「大阪能楽殿」を建てたことで有名な大西（手塚）亮太郎は、生涯に 13 箇所もの能舞台を作ったと言われています。その端緒となったのは神戸湊川能楽堂でした。この能楽堂は、神田兵右衛門（＊第一部「①和田神社能舞台」を参照）の助力を得て建てられました。亮太郎は、大阪に住ま

いながらも神戸ではここを本拠地として定期能を催し、数々の弟子を育て、神戸の能謡界に大きな貢献をしました。今回展示した写真（当能楽堂での演能資料、別掲）にみえる「有吟会」を主宰していた福崎仁もその一人で、「元町老」と呼ばれた亮太郎門下の有力人物です。

新進の気鋭に富んでいた亮太郎は、流派の異なる競演などさまざまな新しい試みをした人物でもありましたが、多くの場合その舞台となったのは大阪ではなく神戸でした。大阪や京都ではまだ時期尚早でできないことであっても、新しいものを受け容れる柔軟性に富む神戸ならば可能だと悟っていたともいえましょう。亮太郎没後、この能楽堂は亮太郎門下であった大阪の上野義三郎が来住して管理していましたが、しばらくして閉鎖されることになります。（第一部「②大西能楽堂」をご参照ください。）こうして神戸は本格的な能楽堂を失い、そのことが神戸能楽会館設立の大きなきっかけの一つとなりました。

上田隆一（『点を線にしたい』掲載）

神戸能楽会館と上田隆一

上田隆一（うえだ りゅういち）

明治 27 年（1894） 5 月 18 日～昭和 25 年（1950） 3 月 20 日　大正・昭和期の能楽シテ方観世流。神戸市生まれ。神戸にて活躍。伊東隆三郎、大槻十三に師事。神戸能楽会館、西宮・日芸会館設立に奔走。戦後、宝塚大劇場や西宮球場などで公演し、能の普及に尽力した。（『日本芸能人名事典』三省堂）

神戸の能楽界を語るに際して、最初に名前のあがるのは上田隆一でしょう。神戸のみならず、関西で能の普及のためにさまざまな活動をした人物として知られ、「能楽師にしておくのは惜しいといわれた能楽師」（月刊「能」昭和 58 年２月号、「能楽師の人々」、京都観世会館）であり、「実業家として第一級の人物」でもありました。

本名は、銕本靜太郎。「上田隆一」は、実家の姓と師である伊東隆三郎の一字をもらって名のった芸道上の名です。学校卒業後、貿易商に勤めたものの、病気で半年あまりで退職、家業を手伝うことになりますが、数えで 19 歳の時に謡に出会い、大正 02 年、神戸では大西と勢力を二分していた伊東隆三郎の門下に入ります。以後、大正 07 年に上京して当時東京にいた大槻十三にも師事、大正 09 年に帰神し、観正会を創設します。以後順調に能楽師の道を歩みます。職分になってからは、能舞台を作るとともに、昭和 07 年に大槻十三、井上嘉一郎とともに神戸能楽会を創立するなど、能楽師同士の協力態勢を整えることにも力を注ぎました。また　観能料を下げ、演能時間を短くするなど、「時宜の方法に依つて将来に善処せんとしつゝあるもの」（『神戸謡曲界』３０号、昭和７年１月）とされるような態度は、のちには神戸観世会、能楽普及会などの結成へと続きます。さらに能楽堂以外でも「宝塚能」、「能と舞踊の会」（球場能）、「ＢＫ能」、学生鑑賞会など多様な公演を企画し、戦前から戦後にかけてさまざまな新たな試みを次々に展開していきます。

しかし、戦後の本格的な舞台、日芸会館完成を目前に上田隆一は急逝します。そしてこの活動姿勢は、その長男、照也へと引き継がれていきました。上田隆一・照也親子の能楽普及活動に関しては、先述の坂田昭一氏『点を線にしたい―私本・上田照也の歳月―』（1990 年、上田英子）に詳しくまとめられていますが、後日あらためてご紹介する予定です。

雑誌『神戸謡曲界』について

『神戸謡曲界』が創刊されたのは大正 11 年 10 月のことでした。この雑誌には、当時の神戸の謡曲界の様子をうかがうことができる記事が散見されます。たとえば創刊号には、「神戸紳士能楽壇の人々」として謡曲の愛好家の名前を列挙しており、あるいは「神戸謡曲団体一覧　其一」と題して玄人能楽師の主宰する会を紹介しています。これらを見ると、この頃、謡曲がいかに流行っていたかということがよく分かります。また翌年 05 月刊の３号には「当地出張京阪師家」として、神戸に稽古場を持っていた能楽師をあげています。

このように神戸地区に限定された情報を教えてくれる貴重な雑誌なのですが、残念なことにこの雑誌は全貌が分かっていません。発行された全ての号も確認できていないのが現状です。当センター所蔵分のほかに、法政大学能楽研究所蔵本（及び同研究所鴻山文庫蔵本）、檜書店京都店蔵本を合わせても欠号があり、最終号も５７号であろうと推定されているに過ぎません。この雑誌についての詳細は後日ご報告をしたいと思います。

『神戸謡曲界』
主幹：塩谷甲南（善助）　　発行所：神戸謡曲界社
発行年等：大正 11 年（1922）年 10 月創刊（第１号）～昭和 15 年（1940）02 月（第５７号）？

【参考文献】（＊直接関わるもののみ）
〔論文〕
小泉康夫「神戸の能楽のあゆみ」（『歴史と神戸』七号、一九六三年七月、神戸史学会）
土居晴夫「神戸能楽界の戦後」（『歴史と神戸』二十三号、一九六六年八月、神戸史学会）
神田三郎「神田兵右衛門胤保翁を偲んで」（『神戸史談』二五一号、一九八二年、神戸史談会）
雑誌『神戸史談』二三五号（特集・和田宮とその周辺）（一九七四年、神戸史談会）
〔単行本〕
趣味と名士編集部『国粋 謡曲及能楽　名士と趣味』大正六年、名家大鑑刊行会）
畔柳盈雄・坂田昭二『点を線にしたい　―私本・上田照也の歳月―』（一九九〇年、上田英子）
坂田昭二『近代能楽研究の先達　―横山杣人の歳月―』（二〇〇〇年九月、坂田泰）
大西信久『初舞台七十年』（一九七九年、大西松諷社）
星丘高良編『雞助抄　―久雄のたわ言―』（一九八三年、私家版）
中山信一 編述『師翁和田陽三先生祝詞集　―師翁に関する資料―　―師翁と私との二十五年―』（一九九〇年）
表章「香西精略年譜」（香西精著、表章編『世子参究』、一九七九年、わんや書店）
＊香西精『能謡観照』
倉田嘉弘『明治の能楽（三）』、『明治の能楽（四）』、『大正の能楽』（日本芸術文化振興会）